



# ひょうたん山

小川クリニック 外来小児科センター

医療法人 小川クリニック小児科部門は  
外来小児科センターとして生まれ変わりました！

月～金曜日午後も診療しています(小児科のみ)

クリニックニュース 200号に続き、号外などを数回発行しましたが、以後、クリニックニュース“ひょうたん山”の発行は終了しておりました。今回、クリニックの小児科部門が“外来小児科センター”として新たにスタートを切ることとなり、クリニックニュースを再開致します。

「いやあー！それにしても暑い。京都の祇園祭りと瓢箪山のお稲荷さんの夏祭りが終了したら、小・中学校の夏休みが始まり、猛暑もスタートと言うのが私のような昔人間の感覚ですが、梅雨らしい雨もなく、猛暑・酷暑の連続に熱中症騒ぎが連日テレビで報道されています。子ども達の間では手足口病、ヘルパンギーナ(ウィルス性夏風邪)が流行っていますが、あまり重篤な感染症はないようです。皆様にはあまり実感はないかも知れませんが、小児科医院小川クリニックを開業して23年にな

ります。子どもさんの病気も随分変わりました。重篤な感染症で入院をお願いすることもほとんどなくなりました。ヒブ、小児用肺炎球菌をはじめとする各種ワクチンのおかげで感染症による子どもさんの入院・死亡は確実に減っています。このままでは病院小児科の経営が成り立たなくなって病院小児科は無くなってしまいかと思われるほどです。でもこれって子ども達には本当にうれしい事ですよ。クリニックニュース 200号まで序文はこんな感じてした。いつまでたっても書くことは同じです。

子どもさんの情報をみなさんにお知らせする院内報としてクリニックニュース“ひょうたん山”の再開です。今回からクリニックニュース担当はスタッフ宮本がおこないます。質問・御意見などなんでもよろしく。

## クリニックニュース・ひょうたん山について

平成3年2月5日 小川クリニックは開院いたしました。

日本外来小児科学会(HP:www.gairai-shounika.jp/)という集まりがあります。小児医療に積極的な開業小児科医の勉強・研鑽の場として、今ではたくさんの小児科医が結集する場です。この日本外来小児科学会もちょうど平成3年に立ち上がりました。私(院長)もこの研究会の設立メンバーとして、開院以来さまざまな活動をこの研究会の仲間とともにこなしてきました。そのひとつが“院内報”です。「自分の診療所はこんな所です！ 子ども達の診察にあたって私はこう考えています！ 自分の診察に対する姿勢を患者さんに知ってもらおう！」そんな思いからスタートしたのが院内報です。私の院内報は“小川クリニックニュース・ひょうたん山”と名付けました。1995年7月の創刊号以来すでに18年になります。今回、クリニックニュースを再開にあたりまず診察医の自己紹介です。

### 小川 實(医療法人 小川クリニック理事長)

昭和23年9月10日午後、瓢箪山で生まれました。縄手幼稚園・小学校・中学校、八尾高校から東京の順天堂大学へ進学しました。昭和50年から大阪大学小児科で修業を積みました。高齢者の在宅医療から赤ちゃんの診療まで…。赤ちゃんが生まれる前のお母さんの育児相談(プレネイタルビジット)、こどもの時に心臓の手術を受けて成人となった方の心臓検診、学校医活動、なんでもかんでもの欲張り屋です。

### 福蔭 幸子先生のプロフィール

産地は旧布施市(現東大阪市)。昭和57年に大阪大学を卒業し小児科医となりました。阪大病院で研修後は近畿中央病

院(伊丹)で約7年間、その後出産・育児の期間を経て、大阪警察病院で約7年間勤務しました。そして小川クリニックで小児科の診療をさせていただいております。日本小児科学会専門医です。阪大病院小児科で先天性心疾患や川崎病などの心疾患の患者さんの診療をご指導くださったのが小川先生でした。近畿中央病院時代もご指導いただき、時にはスーパーマンのように駆けつけて下さいました。そのフットワークの速さは現在の先生の診療活動でもそのままだと思います。患者さんやご家族との会話を大切に明るく診療をしていきたいと思っています。

## 岩井 悦子先生のプロフィール

上本町かいわいで育ち、地元の高校から鳥取大学に進学しました。6年間山陰で過ごし、昭和63年大阪市立大学小児科にて医師としてスタートしました。2年間、大阪市内の病院で研修後、富田林のPL病院に小児科として勤務いたしました。その後、長男の出産を機に退職し保健所の乳幼児健診や予防接種などに出務しておりました。それから出産・育児を繰り返しながら保健所や障がい児施設、養護学校、診療所などの仕事も行っていましたところ、研修医時代に循環器科にてご指導いただいた小川實先生(院長)より小川クリニックでの診療のお話がありお手伝いしております。私は現在、20歳を筆頭に4人の子どもがおり、子育ての経験者として、お母さん方の良き相談相手となれるような医療ができればと思っています。



## ～新子育て通信～

一般社団法人・大阪小児科医会自慢の「子育て通信」が発刊以来15年目に全面改訂されました。

子育て通信のなかからお母さん・ママへ情報を提供します。

### 脱水症について

お子さんが熱を出したり、吐き下しをした時に「脱水症」に注意することは御存じですよね。子どもが脱水症になりやすいのには理由があります。それは体の水分量の割合が大人に比べて大きいこと(体重の60～70%)、水分が代謝されるスピードが速いこと、そして体の水分量を調節する腎臓が未熟なためです。脱水症がひどくなるとおしっこの量が少なくなります。皮膚の張り(緊張)がなくなり、目は落ちくぼみ、唇や舌が乾燥します。手足が冷たくなり呼吸が早くなります。うとうとと寝てばかりいたり、逆に興奮状態になったり、けいれんをおこす場合もあります。脱水症の程度を見分ける簡単な方法は、体重を裸で計ること。短期間の体重減少はその分量の水分が体から失われたことを意味します。例えば、体重10kgのお子さんが嘔吐・下痢で体重9kgになったとします。体重1kgの減少は体から約1リットルの水分が失われたことを意味します。体重が10%減少したらかなりの脱水症ということになります。5%以上の脱水症はすぐ病院に行くこと。脱水症の程度を見誤らないためにも普段から正確な体重(裸で測定)を知っておきましょう。小児科受診や健診の時に測定してもらい、母子手帳にこまめに記録しておくのがいいですね。「脱水症」は水が脱すると書きますが、本当は水と塩分(電解質)が体から失われます。だから治療には水分だけでなく、ナトリウムやクロール、カリウムといった電解質の補給も大切になります。脱水症の時にナトリウムを含まない水やお茶だけを補給すると薄い尿がたくさん出て、かえって脱水症がひどくなってしまうことがあることも知っておいて下さい。



### 学校で感染が話題になる皮膚の症状について (プールに入っているの?)

- 1) 伝染性膿痂疹(とびひ):かきむしったところの滲出液、水疱内容などで次々にうつります。原因はブドウ球菌などの感染力の強い細菌(バイ菌)です。プールの水ではうつりませんが、触れることでほかの人にうつす恐れがありますのでプールや水泳は治るまで禁止して下さい。とびひになったら早いうちに治療して下さい。
- 2) 伝染性軟属腫(みずいぼ):プールの水ではうつりませんのでプールに入っても構いません。ただし、タオル・浮き輪・ビート板などを介して感染することがありますから、これらの共有はできるだけ避けて下さい。プールの後はシャワーで肌をきれいに洗いましょう。原因は軟属腫ウィルスでウィルスに対する抗体ができれば自然に治ります。
- 3) 頭虱(あたまじらみ):アタマジラミに感染しても、治療を始めればプールに入っても構いません。ただし、タオル・ヘアブラシ・水泳帽などの貸し借りはやめましょう。

～日本臨床皮膚科医会・日本小児科皮膚科学会の統一意見として出されました～